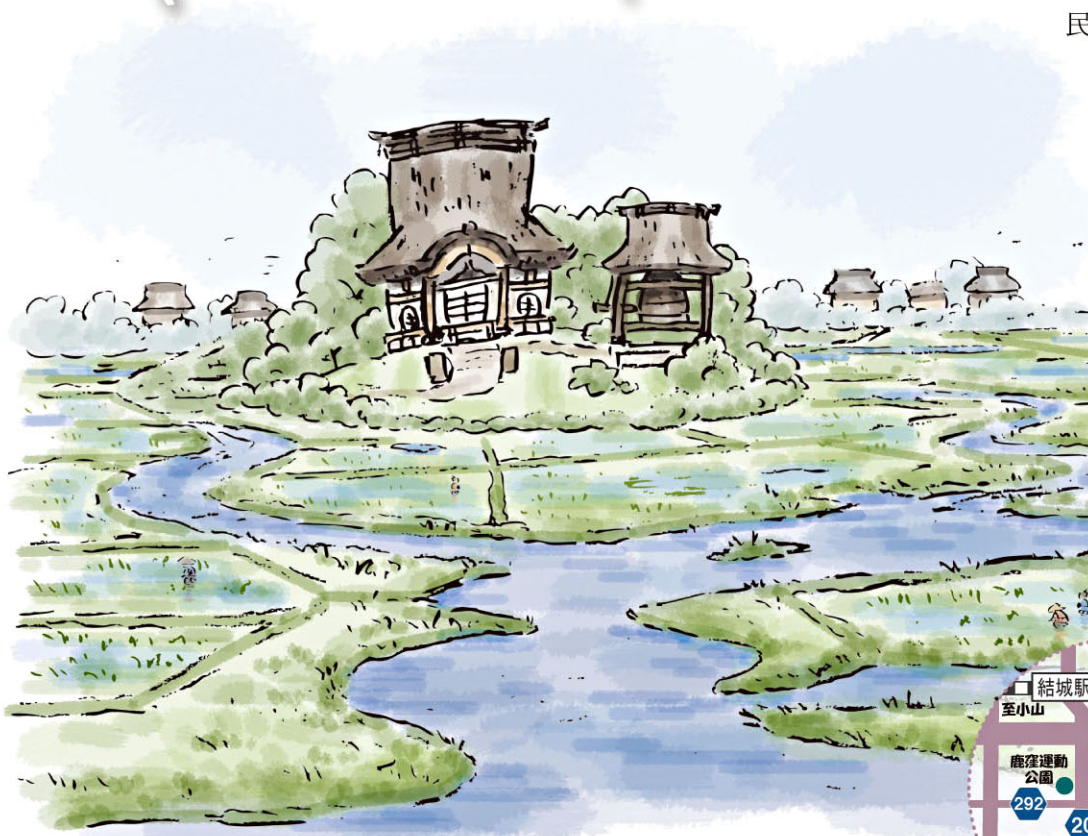


わんぱく

冬号



民話を楽しまっ

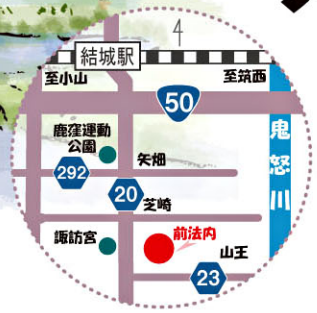
民話ゆき

鐘かね

が

淵ふち

文・結城市教育委員会
挿絵・佐々木明



結城市上山川に、前法内と
いう集落があります。この地
域に、むかしから、いつた
えられている「鐘かねが淵ふち」とい
う伝説がのこっています。

この前法内の南はしは、田が一面に
ひろがり、広い水田となっています。
ちようど、この広い水田を見おろす
ように、ごだかいおかの上に、
慈眼寺じげんじという寺が、たっています。

このおかのふもとを
「鐘が淵」といい、この地名と
寺の鐘にまつわる話です。
いまから、千年ほど前、
平将門たいらのまさかたという武将ぶしやうが、たたかい
をしていたころ、広い水田は、
広い広い沼であったそうです。

そのころの人々は、この沼を利用

して、稲をそだて、秋にはおおくの米をとり、村人たちのたいせつな食りようとなっていたそうです。しかし、少しの雨でも、すぐに沼の水はあふれ、村人たちが苦労してつくった稲や田をあらしてしまい、秋のとり入れをまたず、稲はかれ、田はあれてしまったそうです。そして、まいとし、雨がふると村人たちは心配し、水害のために苦しい生活をいられていました。

あるとき、村人たちは、水害から自分たちのくらしをまもろうとして、沼のまわりをつつみでかこみました。村人たちの力で、りっぱなつつみができあがり、ことしこそはと村人たちは田や畑ののら

しごとにせいをだしました。

しかし、この年も秋のながあめで、村人たちの苦労も水のあわとなり、つくりあげたつつみも、沼の大水のために、こわされてしまいました。

たびかさなる水害に
よって、

村人たちは、
はたらく
気持さえ
うしない
かけていました。



そのすがたをみて、
慈眼寺の住職は村人たちをは
げまし、前よりもりっぱなつ
つみを村人とつくりました。

そのおかげで、村人たちは
あんしんして、田や畑のしごとに

せいをだすことができました。

それから、二年の年月がたち、三年目の春をむかえました。ことしもゆたかな秋のみのりをねがって村人たちはいっしょうけんめいにはたらかしました。

しかし、五月のなかばをすぎると、雨がふりつづきました。村人たちは、空をあおいでは心配し、また、このつつみが

「こわされてはどうしよう。」
と、よれば、みんなで不安げに話しあっていました。村人の心配をよそに雨はふりやまず、もう十五日もふりつづいています。村人たちは、いっつ沼の水があふれだすかと心配し、あつまっては相談をしました。

しかし、いろいろな考えがでて、
いっこうに話しがまとまりません。



村人たちは、こまった

すえに、慈眼寺のぼさつ
様においのりをして、つ
つみをまもってもらうこ
とになりました。村人た
ちは寺にあつまり、いっ
しょうけんめいにおいの
りをしました。すると、村人



たちの前に、ぼさつ様があらわれ、

「寺の鐘を沼になげいれれば、かならず、つ
つみはまもられる。」

といて、ぼさつ様はすがたをかくしてしま
いました。

村人たちは、さっそく住職と
そうだんをし、寺の鐘を沼に
なげいれ、ぼさつ様においの
りをしました。すると、やむ
ことのしらなかつた雨もやみ
はじめ、村人たちが心配し
た水害もなく、もとの平
和な村にもどりました。

それからというもの、
どんなに雨がふるうとも、
沼の水があふれたり、つ
つみがこわれたりするこ
とがなくなったそうです。

おしまい

